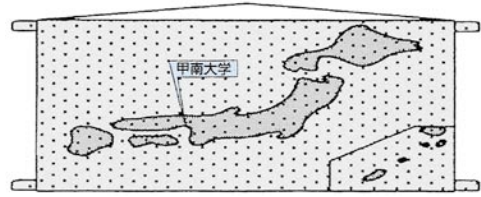


Zephyr

〈第40号〉

ゼフィール・にしかぜ


<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

《特集＊異文化体験のすすめ》

☆所長からのメッセージ 海外語学講座は異文化体験の第一歩です……………	胡 金定……………	1
〔英 語〕「まず出かけてみる。それも若いうちに」……………	伊庭 緑……………	2
〔ドイ ツ 語〕異文化への旅 ～自分にとって学びがいのあることを探して～ ……	藤原三枝子……………	3
〔フランス語〕Allons en France! フランスへ行ってみましょう！ ……	ディディエ・シッシュ……………	4
〔中 国 語〕百聞は一見に如かず―中国の文化を理解するための旅のおすすめポイント― ……	石井 康……………	5
〔韓 国 語〕韓国文化の直接体験への誘い……………	金 泰虎……………	6
〔日 本 語〕外国語学習の動機と留学……………	原田 登美……………	7

海外語学講座は異文化体験の第一歩です

国際言語文化センター所長 胡 金 定

異文化 (Different culture) とは、ある人が所属している文化と異なる文化を指します。国や民族、地域、宗教、風俗、人種、さらに家族の単位で見ることができます。異文化は必ずしも国家間、民族間のものとは限っていません。同じ国、同じ民族同士にも異文化は存在しています。日本にも県民性というものがあり、東西比較すると相違が見えてきます。よく比べられる東京と大阪だけを見てもたくさんの違いがあります。たとえば、東京はエスカレーターに立つとき、左に寄りますが、大阪は右に寄ります。同じ「日本橋」と書いて、東京は「にっぽんばし」と読んで、大阪は「にほんばし」と読みます。マクドナルドのことを東京は「マック」、大阪は「マクド」と略します。「アホ」と「バカ」の言葉のニュアンスにも違いがあります。食文化に関しても、うどんやそばのダシは東京は大阪よりも濃いです。日本ならではの食材である納豆を、東京の人は好きな人が多いですが、大阪では苦手な人が多いです。このように枚挙に暇がありません。日本国内でも相違が多く見られますので、国が変われば、「常識」は「非常識」になったりします。それが大きな錯覚であると思い知らされる場面に遭遇することがよくあります。例えば、家のトイレのドアを常に閉めておくことは日本の常識ですが、アメリカでは誰も居ないとき、ドアは開けっ放しにしておかなければなりません。バスタブのお湯は皆で共有に使うのは日本の常識です。しかし普通の中国人にとってそれは考えられないほど不潔なことです。私は日本に来たばかりの時、友達の家で招待されて大失敗をしました。1 番目に風呂に入ったのでお湯を抜いて上がってしまい、後の人は沸かし直して入らなければならませんでした。ドイツでは、ブドウを、皮も一緒に食べて、種も一緒に飲み込みます。また、男性が小便をするとき、「便座に座ってするように」と教育される家庭が多いようで、立小便禁止のシールをよく目にします。フランスでは、出会ったときや別れるとき、または謝りたいとき頬と頬とを合わせて軽いビズをします。日本では頭を下げるお辞儀をします。また、意見を言いたい時や人を呼ぶ時には人差し指だけをピンと伸ばして手を挙げますが、日本人は5本の指をきっちりと揃えて挙げます。日本も韓国も同じお鍋

をつつきますが、マナーには相違があります。韓国ではお茶碗を持って食べてはいけない反面、スプーンでご飯を食べたり、女の人が胡坐をかいて座って食べたり、立てひざついて食べていたり、お酒を飲む時に目上の人の前では顔を反らして飲むことはマナー違反ではなく習慣になっています。

経済・社会のグローバル化が進む今日、異文化を知ることが非常に重要になってきています。国際言語文化センターは「複数の言語の修得を通して、異文化を理解する広い視野を育み、多言語・多文化主義の複眼的な思考と多様な価値観を育成する」ことを教育理念として掲げています。「異文化理解」、「国際理解」、「言語と文化」などの科目を開設し、目標言語の国の思想や芸術、文学はもちろん、政治、経済、教育、環境、風俗習慣などすべての社会現象や日々の生活の事象を学ぶ環境を整えています。世界のさまざまな文化を理解していくと、日本文化は独自に形成されてきたものではないことが分かってきます。これまでの異文化交流がどのように行われてきたかを学んでいき、異文化を知ってあらためて客観的に自文化を眺められるようになります。

本センター主催の「海外語学講座」は、夏休みや春休みを利用して約1ヶ月間、アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ、ドイツ、フランス、中国、韓国にある協定大学で行います。長期留学制度（交換留学・奨励留学）もあります。さらに、海外から本大学に毎年数十名受け入れている留学生との交流は、学生たちにとって異文化体験のよい機会となっています。ぜひ「海外語学講座」に参加し、これを異文化体験の第一歩として、外国語の力を伸ばしてください。卒業後、「世界に通用する紳士・淑女」になることを期待してやみません。

「まず出かけてみる。それも若いうちに」

国際言語文化センター准教授 伊庭 緑

「異文化理解」、「多文化理解」ということは今や時代のキーワードで、みなさんも聞いたことがあるでしょう。すでにひとつの学問分野で、たくさんの研究書も出ています。何か入門書でも読んでみようかという人には文化人類学者の青木保が書いた「異文化理解」（岩波新書）をお勧めします。著者はタイの僧院で修行した経験をもとに、修行制度がタイの文化の中核になっていて、社会に対してゆとりをもたらしていると考えています。近代的な社会から離れて「空白の時間」や「境界の時間」を過ごし、社会へと戻っていくというのは異文化を経験することに通じます。また著者は異文化理解の妨げになる偏見や安易なステレオタイプ化についても言及しています。

ただみなさんにお勧めするのは読書だけではありません。自分で日本以外の国に出かけてほしいのです。それも観光旅行ではなく、一定の期間滞在してその地で生活してほしいのです。水泳の本をいくら読んでも泳げるようにはならないし、自転車の本を読んでも乗れるようにはなりませんよね。外国に関する本を読んでも水泳や自転車と同じで、その地に身を置いてみないとわからないことがあります。その国に対する否定的な見解を得るかもしれません。または一生忘れられないようなすばらしい経験をした場合はその国に対しても肯定的な意見を持つようになるかもしれません。自分が「外国人」になって初めて味わういろいろなことがあるのです。

私が昔イギリスの大学寮に入ったとき、周りの学生がよそよそしいと感じました。その数年前にカナダの西の大学に行ったときはキャンパスの内外で、いきなりフレンドリーに話しかけられて垣根の低さに驚いたのですが、イギリス人は日本人と似ているのか、最初は遠巻きに見ている感じです。徐々

にうちとけて気の合う友人ができました。勉強や友人関係など大学内のことだけでなく、陰鬱な冬のイギリスの空の色、ヨーロッパの各地だけでなくアジア、アフリカから移り住んだ人たちとそのことは、その人たちが営むお店、慢性的にトラブルがある交通機関、春先の公園のスイセンの花の可憐さなど、住んでみてわかることがあります。

イギリスでもカナダでも「日本との文化の差」をどう思うかと何度も聞かれました。もちろんの文化の差はありますが、同じ人間として共有する部分も多いのでどう答えていいか戸惑いました。そういった違和感や、きっと外国で生活した人が誰でも感じるだろう疎外感、またはやっぱり感動するところは一緒だといったような共感など、いろいろな気持ちを実感することが大事なのだと思います。そして、自分と違うから批判するのではなく、一歩引いて客観的に見つめることも大切です。外国を訪れた人が、すべてその国のことがわかったように批判することがありますが、ちょっと待てよと思う心が大事です。「木を見て森を見ず」ということが多いからです。

年をとってからお金を貯めて外国に行くつもりという人もいるでしょう。もっともな意見です。でも私は若いうちに、社会にデビューする前に、無理をしてでも一度国外に出ることをお勧めします。「鉄は熱いうちに打て」というではありませんか。

異文化への旅 ～自分にとって学びがいのあることを探して～

国際言語文化センター准教授 藤原三枝子

たくさんの学生さんが海外に出かけるようになりました。さまざまな思いが若い皆さんを海外に向かわせているようです。言語能力の向上や文化に対する興味と同様に、内面の成長を求めて、「自分探しの旅」として留学を決意することも多いようです。ところで、留学中のどのような体験が帰国後の学習意欲につながっているのでしょうか？多くの方が「現地でのコミュニケーション」を挙げています。人はコミュニケーションをするために外国語を学ぶという言い方をよくします。しかし、実際は、コミュニケーションをしながら外国語を自分のものにしていくというのが適切でしょう。海外で、現地の人や同じ外国人との相互作用を通して意味の共有ができたという実感、そしてとくに自分を認めてもらったという喜びは、もっと言語を学ぼうという動機につながっていきます。また、何としても自分の意思を伝えたいという欲求や、それが達成できないときの悔しさを体験したことも、強い学習動機になるようです。

外国語で他者とコミュニケーションを作り上げていくプロセスは、同じ言語圏・文化圏内では簡単なのではないことが困難になったり、当然と思っていたことがそうではないことが意識されたり、フラストレーションや不安感を感じることが多くなります。そうしたことをひとつずつ乗り越えることによって、頼る人がいない海外でも、「なんとか道をきりひらいていける」という自信や、「いろいろやれば、いつかは目ざすところにたどりつけるだろう」という希望が生まれてくるのでしょう。コミュニケーションしながらことばを身につけていくのと同様に、自分探しの旅も、すでに定まった存在としての自分を見極める旅というよりも、実際は、自分を包む社会を広げていくための旅、自分にとって本当に学びがいのあることを探す旅だと言えるかもしれません。

Deciらの「自己決定理論」によれば、人間は本来的に「自律的でありたい」「他者とよい関係を結ぶたい」「有能でありたい」と願っています。これらの欲求が満たされる時に、人は、創造的で、生

き生きと活動することができるようです。たしかに環境が人に与える影響は大きいかもしれませんが、より自律的に行動することで環境との相互作用が自分のために働くように変わることも真実です。そのよい証として、自分の目標を定め、自律的に環境に働きかけることでドイツ滞在の夢を実現した皆さんの仲間をご紹介します。

法学部法学科4回生 池田 謙之



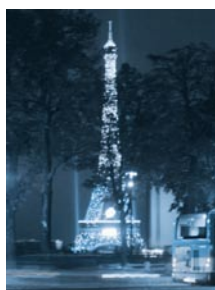
ホームステイ先の家族とともに

僕がドイツに行こうと思った理由は単純にドイツ語力を付けたいという思いからでした。しかし、資金面や夏休みにどうしても外せない用事があり、大学の語学研修には参加できませんでした。そこで、もっともコストのかからないホームステイをしようと決めました。とはいえ、ドイツにつては一切ありませんでしたので、自分で切り開くしか方法はありませんでした。そこで、ドイツにある大学の連絡先をインターネットで探し回り、自己紹介とドイツ語を学びたい意思をE-mailで送り続けました。そして見事、ベルリンのある大学の学生掲示板にその文書を貼ってもらえることになりました。その後、トントン拍子に交渉は進み、2007年9月1日より2週間のハンブルクでのホームステイを経験しました。全て自分の力で行ったので、さらにたくさんの思い出ができました。加えて自分のドイツ語力の不十分さにも気づくことができました。今年の夏には、当時のホストファミリーのお父さんが日本にやってきます。今でも国を越える交流は続いています。突拍子もない方法での渡欧に、家族を始め多くの人に心配はかけましたが、若さゆえの冒険と胸の張れる僕の経験です。

Allons en France! フランスへ行ってみましょう！

国際言語文化センター准教授 ディディエ・シッシュ

海外に行くことが非常に有意義な理由として、まず、皆さんがフランスへ行こうと決心した瞬間から、人間的な成長が始まるからです。これまでと異なった文化空間で生活する勇気が湧いてくると共に、様々な事態を想定し、頭をフル回転させてその対策を考えるでしょう。コミュニケーションの際の特徴を知ることも、その一部です。次に、フランスに到着してからは、決断力と行動力が試されます。最後に、最も重要なことですが、フランスは豊かな歴史を誇り、多様な人種や民族の文化が共存する社会です。きっと皆さんの知性や感性を刺激し、知的な満足を与えてくれるものと信じています。



以上は、理論上の話ですが、実際にフランス滞在を有効にするためのポイントをQ&A方式で紹介しましょう。

Q. フランス人との会話での注意点は何でしょう？

A. フランス人は「プライバシー」の意識が非常に強いので、信仰などの個人的な話題は避け、女性の外見を褒めたりするのも控えたほうがよいでしょう。言葉使いやライフスタイルも社会的な階層により様々なので、外国人としてはあまりくだけた表現は避けましょう。「品性」が大事なものは、どの文化でも同じです。

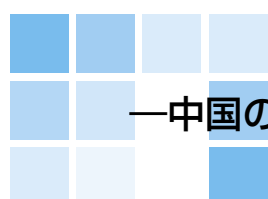
Q. コミュニケーションでの注意点は何でしょう？

A. フランスでは、沈黙は「賢者の証」ではありません。敵意の表れか、愚か者と思われてしまいます。同様に、意見を聞かれたときは、「わかりません」という答えは絶対に避けましょう。無知な人だと思われてしまいます。

Q. 学生として必要な知識は何でしょう？

A. フランスでは、日本の政治体制や経済はもちろん、マンガ・映画・料理や仏教などへの関心が高まっています。簡単な説明ができるようにしておきましょう。中国や韓国との関係や、アメリカ大統領選挙などのトピックスにも普段から自分の考えをまとめておきましょう。自分の考えであれば、他の人と違っていても全く問題ないのです。

詳細は、直接私に聞いてください！



百聞は一見に如かず

—中国の文化を理解するための旅のおすすめポイント—

国際言語文化センター准教授 石 井 康 一

(1)《元陽の棚田（雲南省）》文学部英語英米文学科3年生の山田詩織さんのおすすめポイントです。「今年の2月に一人で雲南省へ行き、昆明、石林、麗江、大理などをまわり、いろいろな少数民族のさまざまな文化に触れることができました。大寒波に襲われてかなり寒かったのですが、ユースホステルや客棧（中国式宿屋）に一泊400円程で泊まり、危険なこともなく楽しい旅でした。元陽の棚田は二千年前から少数民族が築いてきたもので、世界遺産に申請中だそうです。田んぼに水を張っている時期の日の出の時間帯が最も幻想的で美しいと聞き、日の出前にバスに乗り、真っ暗な山道を登りました。今回の旅で一番感動した光景でした」。写真はすべて山田さん撮影のものです。

以下(2)–(5)は私のおすすめです。

(2)《上海博物館（上海）》、中国の三大博物館のひとつ。新しいので展示は見やすく工夫されています。ぜひ日本語のイヤホンガイドを借りて下さい。わかりやすい解説で、中国の歴史と文化の入門に最適です。

(3)《賈三灌湯包子館（西安）》西安の人なら知らぬ者はないスープをたっぷり湛えた包子^{パオツ}。包子といえば普通は豚肉ですが、ここはイスラム系の店ですので、具は羊肉・牛肉・三鮮（野菜）の三種類、1セロ200円程度です。シルクロードの出発点である西安の、東西文化が融合した美味を体験して下さい。

(4)《盧溝橋と中国人民抗日戦争紀念館（北京）》中国語では「記念」ではなく「紀念」と表わします。



元陽の棚田



麗江



大理

現代史の舞台にもなった美しい石造の橋、盧溝橋。すぐ近くの中国人民抗日戦争紀念館は中国側から見た現代史。総体的に冷静で客観的な展示で、最後には日中両国が未来に向けて友好関係を築くことの重要性を訴えています。今後は英語・日本語の解説もつけて戦争の悲惨さという普遍的なメッセージを広く発信する方向に展開してほしいです。郊外にあるのでタクシーをチャーターするのが便利。運転手との交渉が必要ですが、往復が2時間、見学2時間、計4時間で約4000円でした（2007年夏）。(5)《図書大厦と蒲蒲蘭絵本館（北京）》地下鉄西单すぐの図書大厦は北京で最大級の書店。外国人向けの中国語学習書も揃っています。たくさん買ったら地下一階の郵便局出張所から日本に送ることもできます。DVD・CD売場もまた最大級なので、あれこれ見ているうちに時間がどんどん過ぎてしまいます。一方、建外SOHOにある蒲蒲蘭絵本館（<http://www.poplar.com.cn>）は日本のポプラ社のこぢんまりとした店。中国語に翻訳された日本の絵本は300円位からでおみやげにも最適。店内で中国の子供達と交流できるかもしれません。

○最後に本題からそれますが《慰霊と復興のモニュメント》（神戸市役所南側）。95年に起きた阪神・淡路大震災（中国でもよく知られています）で亡くなったすべての方の名前が銘板に刻まれています。中国人の友人が神戸に来た時は必ず案内しています。今回、5月12日に四川省で大きな地震があり、多くの人が亡くなり、多くの人が苦しんでいます。神戸のこのモニュメントは、中国人日本人の区別なく、地球上に生きる限り避けられない天災についての心の痛みを共有する場になっていくと思います。（追記：6月14日には岩手・宮城内陸地震が起きました）

○旅の情報収集は、チューターの時間や「中国語学習相談アワー」（月曜昼休み、6号館5階中国語韓国語学習指導室）を利用して下さい。「百聞不如一見」中国を旅して中国語を磨きましょう！

韓国文化の直接体験への誘い

国際言語文化センター准教授 金 泰 虎

冷戦の構図が崩壊して、交流のグローバル化時代が到来した今、我々はその真っ直中で生活を営んでいます。この時代の特徴は、何よりも自由に国境を越えた様々な形の交流が盛んで、また種々の情報を簡単に手に入れることができるという点にあります。

交流をめぐって賛否両論はあるものの、その度合いは年々深まっていると言えます。情報に関しては、従来のメディアに衛星放送やインターネットが加わり、また国境を超えた人々の移動が激しくなるにつれ、その人々によって沢山の情報が持ち込まれています。私たちは、洪水のように押し寄せる情報の中から、関心事に合わせて情報を選択することができるのです。

しかし、これらのチャンネルを通じて得た間接的な情報には限界があると言えます。というのは、情報をもたらす主体のフィルター（意図）によって濾過された、つまり編集された情報には、その主体の主観的な価値観や判断基準が込められている可能性が高いのです。そこで、他人の価値判断に基づいた情報ではなく、簡単に諸外国に出かけられるというグローバル化時代の利点を活かして、直接自分の目で確認し、体験してみることをお勧めします。

特に、日韓は隣国であるが故に、長い歴史の交流関係の中で共感し合うこともあれば、対立してわだかまりを残すこともありました。前近代における出来事はさておいても、20世紀前半における日本の植民地支配で、未だに被害者と加害者の認識の差が浮き彫りになっています。この背景には様々な狙いや思惑が交差しており、交流には政治主導、つまり上からの交流推進が目立ちます。しかし、政治的な目線で行う交流は、国家間の利害を敏感に反映するため、持続性が乏しく、むしろ民間レベルの交流や韓国文化の直接体験を妨げるという側面をもっています。

一方、幸いに日韓では、民間レベルの交流による韓国・日本体験が活発になっています。いわゆる日本における「韓流ブーム」、逆に韓国における「日流ブーム」がこの相互の交流や文化の直接体験を促しています。政治レベルでは葛藤があっても、それに影響されず、民間レベルで交流を推進し、根を深く下ろしつつあるのです。これは両国の社会が異なる意見を冷静に受け入れられるほど、成熟した社会へ発展したことを示しています。つまり、現地に足を踏み入れて自分の目で確かめて判断するという異文化の直接体験によって、相互理解が進んだ結果、いわゆる「草の根交流」が活発になったのです。

とは言え、日本の近代国民国家成立過程で形成され、再生産されてきた韓国に対する偏見が、完全に払拭されているとは言えません。歪んだ認識を正して、またさらなる偏見を作り出さないためにも、韓国文化の直接体験は欠かせないことだと思います。

今や日韓は相互を訪れる人々が、年間、各々300万人に達する時代に突入しています。ぜひ、この時代の波に乗って、誰かの意図、判断によって編集された情報やアプローチではなく、直接自分で体験し、判断するという経験をしてみて下さい。今のグローバル化時代は、韓国文化を直接体験する最適な環境であると思います。

外国語学習の動機と留学

国際言語文化センター教授 原 田 登 美

外国語を習得するために一番いい方法は何でしょうか。やはり留学することだと思います。留学とはその言語を必要とする場所や状況に自分を置くことだからです。その言語が必要な場所や状況とはどんな場合でしょうか。例えば、自分の友人や恋人がその言語を使う人たちだとしましょう。その人たちと理解しあうためにはどうしてもその言葉に通じる必要があります。また、例えば自分の興味のある音楽、映画、スポーツ、ファッションなどをもっとよく知るためにはその言葉に通じることが早道です。自分の関心のあるもの、大切なものに空間的にも心理的にももっと近づきたい、そのためには、現にそのものが存在する中に自分を置きたくなる、それが人間の感情であり心理です。つまり、

私たちは自分と関わりの深い人々や興味のあるものとのつながりを強くし深めていくことを望むのです。このような望みを学習の動機として、言語の習得への意欲を高めていくのです。自分との関わりを強く深く広くする環境を求めていくこと、それが留学することの意味なのです。

甲南大学には毎年40名から50名の外国人学生が日本語を学びに留学して来ます。物価の高い日本にわざわざ遠い国から大きな精神的・肉体的なエネルギーを費やして、彼等はなぜ日本へ日本語を勉強しにくるのでしょうか。その留学生たちに近年、留学の動機と経験について調査をしたことがあります。彼らは留学してどんな時に日本語を勉強して良かったと感じるのか。

まず、自分の日本語が通じた時の喜び、日本語が上手になっていることが実感できた時、自分の家族が日本に来て通訳で役に立った時など、これまで自分が勉強してきた成果が少しでも実っていると分かった時だそうです。自分の勉強している日本語が実際に日本人を相手に通じたという喜びこそ、言葉の本来の目的に繋がっているのではないのでしょうか。

彼らの学習意欲をさらに高めるのが、ホームステイであり甲南大の学生をも含む日本人の友人です。ホームステイの中で日本人の家族と生活を共にしながら、日本語を使うことが毎日の生活を生きることにつながっています。言葉が生活や文化と共にあることを否応なしに実感する日々が続くのです。日本で生活している中でホストファミリーや友人と喜怒哀楽を共にしながら、毎日少しずつ日本の習慣や文化に溶け込み自分の精神的土壌が広がっていく。時には日本の生活や文化に疑問や反感を覚える時があるでしょう。また、時には日本の生活や友人が新しい発見や異文化への興味を与えてくれます。甲南大生とクラブ活動やキャンパスでおしゃべりをしながら、国や習慣や文化を越えて感情を分かち合えるのは実に刺激的で生きる実感に満ちた時間ではないのでしょうか。

だから、留学生たちは日本に留学していろいろとつらいことや悲しいことがあっても日本語の勉強をやめたいと思ったことはないと言います。それどころかますます日本語への学習意欲が掻き立てられるのだそうです。そして、これだけの学習の努力や苦勞をしたのだから、将来にわたって何とか仕事や生活に生かせたらと、次第に職業や将来の進路に日本語と留学経験を生かしたいと考えていくようです。その過程の中で、自分の日本語能力の何が足りないのか、聞き取りか、読解か、それとも会話能力かなどと学習の目標がさらに具体化していくようです。

学習動機と留学経験をまとめてみると、留学によって、新たな自分を発見し、新たな文化的な世界の発見と日本語に対する関心の深まりがあったということになります。さらに付け加えるなら、日本人の友人は言うに及ばず、世界中から来ている他の国々の留学生とクラスメートや留学仲間として友情を培えたのが、何よりの貴重な財産だったと留学生は口々に語ります。

